



北海道におけるヨシキリ 2 種の繁殖期の分布

藤巻裕蔵

〒 072-0005 美唄市東 4 条北 2 丁目 6 - 1

摘要

1976～2021年の5月上旬～7月下旬、北海道の1,041区画(4.5 km × 5.0 km)内の1,178か所でのラインセンサスと170区画での定点調査、文献などの記録に基づき、オオヨシキリ *Acrocephalus orientalis* とコヨシキリ *A. bistrigiceps* の分布を明らかにした。オオヨシキリはおもに南西部から中央部にかけて、コヨシキリはこの他東部と北部にも分布しており、観察された区画は前者で10.8%、後者で18.8%であった。両種ともおもな生息環境は草地で、畑・水田、住宅地でも草地のある所に生息していた。両種ともおもに標高200 m以下に生息していた。

はじめに

日本で記録されているヨシキリ属 *Acrocephalus* 鳥類のうち、国内で繁殖するのはオオヨシキリ *Acrocephalus orientalis* とコヨシキリ *A. bistrigiceps* の2種である(日本鳥学会2012)。両種とも草原性の夏鳥で、北海道に渡来するのは、前者が5月上旬～中旬、後者が5月下旬～6月上旬である。これら草原性の2種は森林には生息しないので、森林が面積の約7割を占める北海道ではかなり地域的に偏った分布をしていると考えられる。

分布は種の基本的な特性の一つで、その種の生態を知るには分布を明らかにすることが重要である。種により分布には広い範囲にわたるものや局所的なものなど様々のタイプがある。北海道では繁殖期に生息する鳥類の多くはほぼ道内全域に分布するが、一部の種、例えばホトトギス *Cuculus poliocephalus* やメジロ *Zosteropus japonicus* などは地理的に偏った分布をする(藤巻2017a, 2017b)。そのため、多くの種の分布に関する情報は、北海道の鳥類相や鳥類群集

2021年12月24日受理

キーワード: オオヨシキリ, コヨシキリ, 分布, 繁殖期, 北海道

の地域差について検討する場合の重要な基礎データとなる。

現在、調査に基づいて図示した分布図には第2回自然環境保全基礎調査(環境庁1979)と種の多様性調査(環境省自然環境局生物多様性センター2004)がある。これらでは、調査自体は1/5万の地形図を縦横とも4等分した区画(約4.5 km × 5 km, 以後「5 km 区画」とする)を単位として実施されたが、分布図は1/5万の地形図の大きさの区画(約18 km × 20 km, 以後「20 km 区画」とする)である。したがって、ある種が20 km 区画内で1か所の5 km 区画で記録されても、20 km 区画全域に分布していることになる。そのため、分布の偏りがあるような種でもそのことがあまり明瞭ではない場合がある。例えば、コマドリ *Luscinia akahige* では、20 km 区画で分布を図示すると、低地の平野部にも分布しているように見えるが、5 km 区画を単位として図示すると、おもに山地に分布することが明らかである(藤巻2020)。

この報告では、筆者が北海道で1976年以来

行ってきた鳥類の生息状況調査の結果に基づいてオオヨシキリとコヨシキリの繁殖期の生息環境について述べるとともに、既存の論文や各種報告書などの調査・観察記録を追加し、表示単位として5 km 区画を用いて北海道におけるオオヨシキリとコヨシキリの分布図を示し、これらの種の分布の特徴について述べる。

調査地および方法

調査地は一部の離島（奥尻島，利尻島）を含む北海道全域であるが、おもに調査したのは中央部と南東部（北緯44度0分以南，東経141度15分～145度の範囲）である。また、標高では海岸部から1,900 mまでの範囲である。

5万分の1の地形図（日本測地系に基づく地形図）を縦横それぞれ4区分した5 km 区画を設定し、1,041区画で調査した。各区画に2 kmの調査路を1か所、一部の区画では複数の調査路を設けたので、調査路総数は1,178か所である。調査時期は1976～2021年の5月上旬～7月下旬で、この間に1調査路につき1～2回調査した。調査では6倍または8倍の双眼鏡を用いた。調査時間帯は夜明けから8時ごろまでで、調査路を約2 km/時で歩きながら観察帯の幅を定めずにオオヨシキリとコヨシキリを記録した。

調査路の環境を調査路沿いの環境にしたがって森林（調査路の標高は5～1,900 m）、草地（標高2～260 m）、畑・水田（標高2～660 m）、住宅地（標高2～550 m）に4区分した。草地はおもに河川堤防の法面の草地で、この他に牧草地などがある。また畑・水田では調査路沿いに高茎草本や灌木が生育する側溝などや一部に草地がある場合があり、住宅地では公園などの緑地、空地となっている草地、川沿いの草地がある場合がある。垂直分布では標高帯を200 m以下、201～400 m、401 m以上に区分した。

なお、調査路に高低差がある場合には最低点と最高点の中間の値をその調査路の標高とした。

上記の1,178か所の調査路で得られた結果だけを用い、環境別・標高別に調査路総数に対するオオヨシキリとコヨシキリが観察された調査路数の割合を百分率で示した値をそれぞれの種の「出現率」とした。

分布図作成のため、上記の調査を補う目的で前述の1,041区画以外の170区画で上記の調査と同じ期間に定点調査を行った。この調査では、区画内の任意の場所で日中の20～30分間に観察された種を記録した。さらに以下の論文や各種報告書の調査結果を用いた：阿部ほか（1970）、由井（1970）、黒田ほか（1971）、石城・松岡（1972）、松岡（1973）、阿部（1975）、正富（1976）、中川（1981、1982、1985）、佐藤・石川（1981）、橋本（1982、1986、1987、1988、1993、1996、2007）、川辺・阿部（1982）、鈴木ほか（1983、1989）、川辺（1985、2005）、中川・藤巻（1985）、松本ほか（1986）、鈴木（1986）、二村（1987、2004）、大迫（1988）、三浦（1988、1989）、小杉（1989）、鈴木ほか（1990、1991）、日野・中野（1992）、磯（1987、1988、2005、2007、2008）、正富・富士元（1987）、芳賀・小林（1989）、旭川市（1991）、北海道（1992、1994）、北海道環境科学研究センター（1993、1994、1996）、富川ほか（1995）、島田（1996、2016）、筒淵（1998）、木下（1999）、道川ほか（1999）、北海道野鳥愛護会（2001）、今野・藤巻（2001）、日本鉄道建設公団（2002）、池田（2005）、嶋崎（2006）、玉田・梅木（2007）、森（2010）、Tamada（2010）、嶋崎ほか（2014）、宮本（2017）、中川ほか（2017）、貞国（2019）、富川（2019）、渡辺（2019）、玉田（2020）。この他に日本野鳥の会各支部報（道南松山2013～、札幌2018～、道北2009～）、室蘭

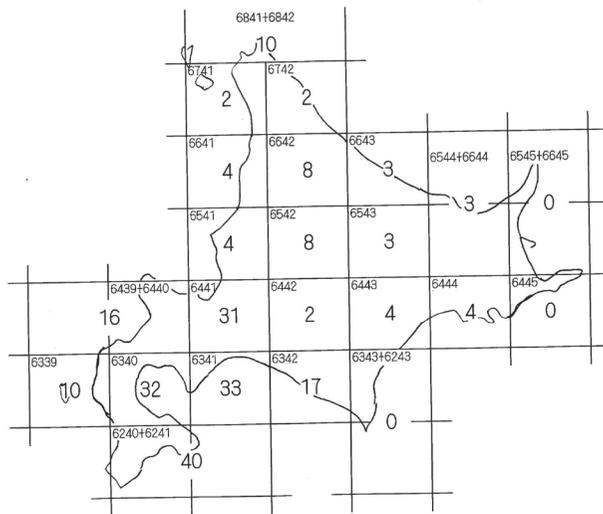


図2. 一次メッシュ（左上の4桁の数字はメッシュコード）ごとのオオヨシキリが観察された区画の割合。

Fig.2. Proportion of quadrates in which *Acrocephalus orientalis* was observed by first-order meshes (Figures at above-left indicate the mesh-code).

られたのは、函館平野（渡島地方南部）、内浦湾西部沿岸（渡島地方北部）、勇払平野（胆振地方中部）、石狩平野（石狩・空知地方）、十勝平野（十勝地方中部）、上川盆地（上川地方中部）、名寄盆地（上川地方北部）、斜里平野（網走地方東部）である（図1）。十勝地方以外の北海道東部と北部でオオヨシキリが記録された区画は少なかった。このような分布状況をわかりやすく数量的に示すため、一次メッシュ（国土地理院の1/20万地形図1枚に相当）ごとにオオヨシキリが記録された区画の割合を図2に示すと、南西部より北部や東部でこの割合が少なくなる傾向が見られる。

コヨシキリは1,746区画のうち328区画、18.8%で記録され、オオヨシキリより多かった ($\chi^2 = 43.865$, 自由度=1, $P < 0.01$)。コヨシキリが記録された区画がある程度まとまって見られたのは、函館平野、内浦湾西部沿岸、勇払平野、石狩平野、十勝平野、釧路平野（釧路地方南部）、根釧台地南部（釧路・根室地方南部）

と根室半島、斜里平野、天塩平野（留萌地方北部）、オホーツク海沿岸部である（図3）。富良野盆地（上川地方南部）、上川盆地（上川地方中部）、名寄盆地（上川地方北部）など内陸部で観察された区画は非常に少なかった。このような分布状況を数量的に示すため、オオヨシキリの場合と同様に一次メッシュごとにコヨシキリが記録された区画の割合を図4に示すと、内陸部の6442、6542、6543でこの割合が非常に少ない傾向が見られる。

環境別・標高帯別分布

環境・標高区分ごとに全調査路数とオオヨシキリとコヨシキリの出現率を表1に示す。

両種とも草地、畑・水田、住宅地で観察されたが、森林では観察されなかった。

オオヨシキリの出現率は草地で35.1% (47/134)と高く、畑・水田では9.9% (49/493)、住宅地で6.1% (4/66)と低く（表1）、畑・水田と住宅地の間には有意な差は認められな

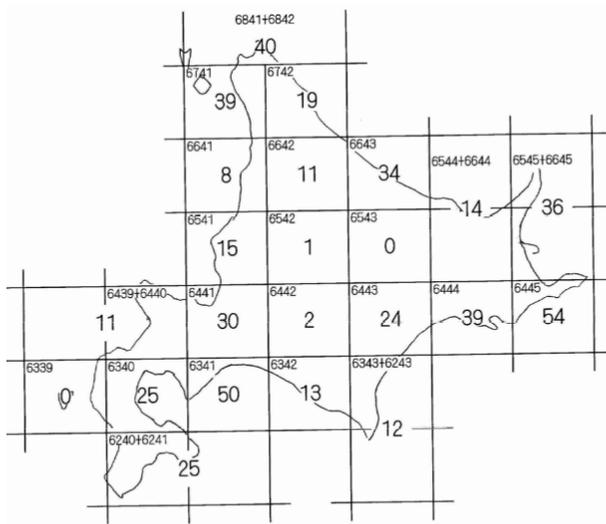


図4. 一次メッシュごとのコヨシキリが観察された区画の割合。

Fig.4. Proportion of quadrates in which *Acrocephalus bistrigiceps* was observed by first-order meshes.

考察

オオヨシキリはおもに北海道南西部から中央部にかけてと東部では十勝平野に分布しており、十勝平野以外の東部と北部では観察された区画が非常に少なかった。最近の釧路湿原鳥類目録（貞国 2019）によると 1935～2019 年にオオヨシキリの記録は 5 例だけで、根室支庁管内鳥類リスト（高田 2001）にはオオヨシキリの記述はない。コヨシキリの分布を見ると、北海道南西部から中央部にかけてはオオヨシキリの分布とほぼ同じであったが、東部と北部ではコヨシキリが観察された区画がオオヨシキリの場合より多く、北海道全体でみるとコヨシキリの方がより広く分布している。このことは同じ環境での両種の出現率の差にも反映している。

ヨシキリ類 2 種の分布について、Brazil (1991) は同じようなことを指摘している。しかし、コヨシキリの分布では内陸部の盆地で観察された区画が非常に少なく、空白状態に近

い。環境庁（1979）と環境省自然環境局生物多様性センター（2004）の分布図でも、オオヨシキリが東部と北部で少ないこと、コヨシキリが東部や北部でも記録されているが、盆地のある内陸部ではほとんど記録されておらず、記録のあるのは 1/5 万の地形図「旭川」に相当するメッシュだけである。ただし、環境庁（1979）と環境省自然環境局生物多様性センター（2004）の分布図は 20 km 区画（その面積は今回用いた 5 km 区画の 16 倍）を図示単位としており、20 km 区画のうち 1 か所の 5 km 区画で記録された場合でも 20 km 区画全域で記録されているように表示されるため、オオヨシキリがおもに平野と盆地に、コヨシキリがおもに平野と海岸に分布するという特徴が不明瞭である。

北海道で繁殖する鳥類の多くは全域に分布するが、一部の種は南部、南西部、西部、東部、北部のいずれかの地域に偏った分布をする（藤巻 2020）。コヨシキリのように内陸部にはほとんど分布しない種は少ない。

表 1. 北海道における環境・標高別のオオヨシキリとコヨシキリの出現率(1976～2021). 括弧内は調査路数. 出現率については本文参照.

Table 1. Occurrence rates (%)* of *Acrocephalus orientalis* and *A. bistrigiceps* in different habitats and altitudes in Hokkaido during 1976–2021.

| 環境 Habitat | オオヨシキリ <i>Acrocephalus orientalis</i> | | | | コヨシキリ <i>Acrocephalus bistrigiceps</i> | | | |
|---------------------------|--|------------|------------|---------------|---|--------------|------------|---------------|
| | 標高 Altitude (m) | | | | 標高 Altitude (m) | | | |
| | ～ 200 | ～ 400 | 401 ～ | Total | ～ 200 | ～ 400 | 401 ～ | Total |
| 森林 Forest | 0 (200) | 0 (148) | 0 (137) | 0 (485) | 0 (200) | 0 (148) | 0 (137) | 0 (485) |
| 草地 Grassland | 35.6 (132) | 0 (2) | — (1) | 35.1 (134) | 62.9 (132) | 50.0 (2) | — (1) | 62.7 (134) |
| 畑・水田 Agricultural land | 12.7 (387) | 0 (95) | 0 (1) | 9.9 (493) | 20.9 (387) | 2.1 (95) | 0 (1) | 16.8 (493) |
| 住宅地 Residential area | 6.3 (63) | 0 (1) | 0 (2) | 6.1 (66) | 4.8 (63) | 0 (1) | 0 (2) | 4.5 (66) |

* (No. of transects of occurrence/No. of transects surveyed)x100. Figures in parenthesis indicate the number of transects surveyed.

オオヨシキリ, コヨシキリともおもな生息環境は草地であった. 畑・水田の場合は, 一部に草地があるか, または高茎草本や灌木が生育する側溝がある環境で, 住宅地では出現頻度は低かったものの川沿いで草地のある環境で観察された. ただし, オオヨシキリがおもに川沿いの草地に生息するのに対し, コヨシキリはそれ以外にも海岸と海岸に近い草地にも生息しており, 農耕地での出現率はオオヨシキリより高かった. 生息環境について Austin & Kuroda (1953) は, オオヨシキリは北海道ではつねに低地のヨシ *Phragmites communis* の生育する湿潤な所に生息するとしている. 清棲 (1978) は北海道でオオヨシキリはヨシが密生する草原に多く, コヨシキリはその他に牧場や海岸の草原に生息するとしており, Brazil (1991) もオオヨシキリはおもにヨシ原に生息するが, コヨシキリはその他にも道路沿いや鉄道線路沿いの草地にも生息すると述べている. ヨシキリ 2 種はおもにヨシ原に生息するが, コヨシキリの方で環境選択の幅が広い (三上 2012). 勇

拓平野の苫小牧市のススキ *Miscanthus sinensis*, オオヨモギ *Artemisia montana*, オオイタドリ *Polygonum sachalinense*, セイタカアワダチソウ *Solidago altissima* などの高茎草原, 面積 19ha でテリトリ・マッピング法により調べた結果では, オオヨシキリは生息せず, コヨシキリのさえずり雄 21.5 羽が記録された (藤巻 未発表). また十勝平野の帯広市のカモガヤ *Dactylis glomerata*, オオアワガエリ *Phleum pratense*, クサヨシ *Phalaris arundinacea*, オオヨモギ, エゾノキツネアザミ *Breca setosa* の高茎草原, 面積 5.6ha ではオオヨシキリは生息しなかったが, コヨシキリではさえずり雄 8～9 羽が記録された (Fujimaki & Takami 1986). 上述のように, Austin & Kuroda (1953), 清棲 (1978), Brazil (1991), 三上 (2012) のいずれもヨシキリ 2 種の主要な生息環境としてヨシ原を挙げているが, 今回の報告の調査地の草地はおもに河川堤防沿いの草地で, ヨシよりオオイタドリなど他種の高茎草本の場合が多く, 苫小牧市や帯広市の乾燥した草地においてもコヨシキリは

かなりの密度で生息していた。北海道でコヨシキリはオオヨシキリが生息しないような乾燥した草原にも生息している。

標高についてみると、オオヨシキリは全て標高 200 m 以下で観察され、コヨシキリは大部分が標高 200 m 以下で、少数が標高 201 m 以上でも観察された。これは生息に適した草地の多くが河川下・中流部の低標高地にあるためであろう。

なお、Brazil (1991) は北海道ではコヨシキリが高山草原にも生息するとしている。しかし、今回の調査では、日高山脈の七つ沼カールの沼周辺の灌木・草原(標高 1,600 m) や雌阿寒岳の高山草原(標高 1,400 m) でも調査したが、コヨシキリは記録されなかった。またコヨシキリは大雪山系自然生態系総合調査や日高山脈自然生態系総合調査の鳥類調査(正富 1976, 藤巻ほか 1979) では観察されておらず、川辺(2003, 2010) の大雪山国立公園鳥類目録でも挙げられていない。今のところ、Brazil(1991) の記述を裏付ける観察記録は見当たらない。

今回の調査の結果、地理分布については従来の知見と大きく変わるところはなかったが、コヨシキリが内陸の盆地では非常に少ないという特徴を明らかにした。分布図についても調査結果を文献の記録で補足し、5 km 区画という小さな単位で図示して従来より詳しい図を示した。おもな生息環境が草地であるという結果は従前の知見と変わらないが、北海道ではコヨシキリはオオヨシキリが生息しないような乾燥した草原にも生息することを明らかにした。垂直分布について言及した報告は少ないが、おもに標高 200 m 以下に生息することを明らかにした。

謝辞

観察記録を提供していただいた飯嶋良朗、梅本正照、川辺百樹、黒沢信道、平沼裕、百武充、松尾芳

武の各氏と日本野鳥の会旭川支部、データの多重比較を行っていただいた(株)ドーコンの山田芳樹氏にお礼申し上げる。

引用文献

- 阿部永. 1975. パイロットフォレスト造成に伴う環境の変遷. VI鳥類. パイロットフォレスト造成に伴う環境の変遷(帯広営林局 編), pp.117-133. 帯広営林局, 帯広.
- 阿部永・小林恒明・石城謙吉・太田嘉四夫. 1970. 北大中川地方演習林鳥類調査報告その1. 北海道大学農学部演習林研究報告. 27:69-77.
- 旭川市. 1991. 自然保護調査報告書総集編. 旭川の動・植物一冊目録・解説. 旭川市, 旭川.
- Austin, Jr. O. L. and Kuroda, N. 1953. The birds of Japan. Their status and distribution. Bulletin of Museum of Comparative Zoology, Harvard College 109:279-613.
- Brazil, M. A. 1991. The Birds of Japan. Christopher Helm, London.
- 藤巻裕蔵. 2017a. 北海道におけるホトトギスの分布. 山階鳥類学雑誌 48: 65-73.
- 藤巻裕蔵. 2017b. 北海道におけるメジロの繁殖期の分布. Strix 33: 119-129.
- 藤巻裕蔵. 2020. 北海道の鳥の分布を調べる. Docon Report 209: 2-7.
- 藤巻裕蔵・芳賀良一・小野山敬一. 1979. 日高山系自然生態系総合調査報告. 第2章鳥類. 日高山系自然生態系総合調査報告書(動物編), pp.57-88. 北海道, 札幌.
- Fujimaki, Y. & Takami, M. 1986. Breeding bird populations in relation to vegetational change in a grassland in Hokkaido. Jpn. J. Ornithol. 35: 67-73.
- 芳賀良一・小林茂雄. 1989. 帯広市岩内自然の村の鳥類. 帯広百年記念館紀要 7: 1-6.
- 橋本正雄. 1982. 釧路管内鳥類観察記録(2) —1971-1980—. 釧路博物館紀要 9: 9-18.
- 橋本正雄. 1986. 釧路湿原釧路川築堤沿いの鳥類センサスについて. 釧路市立博物館紀要 11:

- 61-70.
- 橋本正雄. 1987. 北海道東部, 阿寒湖およびその周辺の鳥類センサスについて. 釧路市立博物館紀要 12: 7-22.
- 橋本正雄. 1988. 釧路湿原鳥類センサスについて. 釧路市立博物館紀要 13:9-18.
- 橋本正雄. 1993. IX.阿寒川水系の鳥獣. 阿寒川水系総合調査報告書, pp.131-150. 釧路市立博物館・前田一步園財団, 釧路・阿寒.
- 橋本正雄. 1996. 釧路管内鳥類観察記録(4)ー1981~1990ー. 釧路市立博物館紀要 20: 13-22.
- 橋本正雄. 2007. 釧路支庁管内鳥類観察記録(6)ー1991~2000ー. 釧路市立博物館紀要 31:11-19.
- 日野輝明・中野繁. 1992. 北海道北部の落葉広葉樹林における繁殖期の鳥類群集. 北海道大学農学部演習林研究報告 49: 195-200.
- 北海道. 1992. 「すぐれた自然地域」自然環境調査報告書. 別寒辺牛湿原・別当賀川下流域. 北海道, 札幌.
- 北海道. 1994. 「すぐれた自然地域」自然環境調査報告書. 道東圏域(平野・海岸部). 北海道, 札幌.
- 北海道環境科学研究センター. 1993. 「すぐれた自然地域」自然環境調査報告書. 道南圏域・道央圏域. 北海道環境科学研究センター, 札幌.
- 北海道環境科学研究センター. 1994. 「すぐれた自然地域」自然環境調査報告書. 道北圏域17地域・道央圏域2地域. 北海道環境科学研究センター, 札幌.
- 北海道環境科学研究センター. 1996. 「すぐれた自然地域」自然環境調査報告書. 道東圏域(山岳部)12地域. 北海道環境科学研究センター, 札幌.
- 北海道野鳥愛護会. 2001. 私たちの探鳥会ー探鳥会30年の記録ー. 北海道野鳥愛護会, 札幌.
- 池田亨嘉. 2005. おもに十勝地方で観察された鳥類1999~2004(2). 帯広百年記念館紀要 23: 9-24.
- 石城謙吉・松岡茂. 1972. 北海道大学苫小牧地方演習林の鳥類相その1. 広葉樹天然林と針葉樹人工林における夏期の種構成と生息密度. 北海道大学農学部演習林報告 29: 43-54.
- 磯清志. 1987. 上川町産鳥類目録. 層雲峡博物館研究報告7: 9-20.
- 磯清志. 1988. 大雪山黒岳総合調査報告. 黒岳の鳥類. 上川町の自然 13: 1-15.
- 磯清志. 2005. 愛山溪(安足間川流域)の鳥類. 層雲峡ビジターセンター研究報告 25: 1-16.
- 磯清志. 2007. 天塩川上・中流域の鳥類. 層雲峡ビジターセンター研究報告 27:17-28.
- 磯清志. 2008. 浮島湿原の鳥類相. 上川町の自然 20: 23-32.
- 環境庁. 1979. 第2回自然環境保全基礎調査. 動物分布調査報告書(鳥類). 環境庁, 東京.
- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2004. 種の多様性調査・鳥類繁殖分布調査報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
- 川辺百樹. 1985. 大雪山国立公園, 原始ケ原湿原の鳥相. ひがし大雪博物館研究報告 (7): 43-48.
- 川辺百樹. 2003. 大雪山国立公園鳥類目録. ひがし大雪博物館研究報告 (25): 1-49.
- 川辺百樹. 2005. 北海道十勝平野北部, 東居辺の鳥類. ひがし大雪博物館研究報告 (27): 37-49.
- 川辺百樹. 2010. 大雪山国立公園鳥類目録補遺. ひがし大雪博物館研究報告 (32): 237-241.
- 川辺百樹・阿部永. 1982. 十勝川源流部原生自然環境保全地域の鳥類. 十勝川源流部原生自然環境保全地域調査報告書(日本自然保護協会 編). pp.247-261. 日本自然保護協会, 東京.
- 木下慎. 1999. 美幌町の鳥相. 美幌博研報 (7): 33-44.
- 清棲幸保. 1978. 増補改訂版日本鳥類大図鑑I. 講談社, 東京.
- 今野怜・藤巻裕蔵. 2001. 繁殖期における利尻山の鳥類. 帯広畜産大学研究報告 22:125-133.
- 小杉和樹. 1989. オタドリ沼の鳥. 利尻町立博物館年報 8: 47-60.
- 黒田長久・白附憲之・千羽晋示・小笠原嵩・由井正敏. 1971. JIBP主調査地, 大雪山地域の動物相調査報告III. 大雪山の鳥類調査(1970年7月). 陸上生態系における動物群集の調査と自然保護

- の研究. 昭和45年度研究報告(加藤陸奥雄編). pp.23-50. JIBP/CT-Sセクション, 仙台.
- 正富宏之. 1976. 大雪山系自然生態系総合調査中間報告(第2報). 第二章鳥類調査. 大雪山系自然生態系総合調査中間報告(第2報) pp.195-222. 北海道, 札幌.
- 正富宏之・富士元寿彦. 1987. 北海道北部サロベツ原野の鳥類相. 専修大学北海道短期大学紀要(自然) 20:253-280.
- 松本光二・黒田弘章・水間秀文. 1986. 名寄の鳥類とその生息環境. 名寄市郷土資料報告 1:7-18.
- 松岡茂. 1973. パイロットフォレストの鳥類相—夏期—. 北方林業 25: 329-334.
- 道川富美子・丹羽真一・渡辺 修・道川弘・渡辺展之. 1999. 北海道北部, 霧立峠周辺の針広混交林の鳥類相と植物相. 土別市博物館報告 17:47-59.
- 三上修. 2012. 仏沼干拓地における草原性鳥類5種の繁殖期における環境選択の比較. 山階鳥類学雑誌 43: 169-175.
- 三浦二郎. 1988. 檜山道立自然公園総合調査IV動物. 第2章鳥類. 道立自然公園総合調査(檜山道立自然公園)報告書. pp.176-202. 北海道自然保護協会, 札幌.
- 三浦二郎. 1989. 狩場茂津多道立自然公園調査IV動物. 第2章鳥類. 道立自然公園総合調査(狩場茂津多道立自然公園調査)報告書. pp.123-146. 北海道自然保護協会, 札幌.
- 宮本誠一郎. 2017. 礼文島の鳥類(2). 利尻研究 36:1-12.
- 森信也. 2010. 知床五湖, ルンチャおよび知床岬における鳥類観察記録2003-2009. 知床博物館研究報告 31:15-24.
- 中川元. 1981. 知床半島の鳥類調査報告. 知床半島自然生態系総合調査報告書(動物編). pp.43-77.
- 中川元. 1982. 知床半島先端部の鳥類. 知床博物館研究報告 4: 49-54.
- 中川元. 1985. 知床半島中央部の鳥類. 知床博物館研究報告 7: 17-20.
- 中川元・藤巻裕蔵. 1985. 遠音別岳原生自然環境保全地域における鳥類. 遠音別岳原生自然環境保全地域調査報告書. pp.79-404. 環境庁自然保護局, 東京.
- 中川優奈・三上かつら・三上修. 2017. 河川が鳥類多様性に与える影響: 函館市亀田川の事例. 日本鳥学会誌 66:133-143.
- 日本鳥学会. 2012. 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会, 三田.
- 日本鉄道建設公団. 2002. 北海道新幹線(新青森・札幌間)環境影響評価書. 日本鉄道建設公団, 東京.
- 日本野鳥の会室蘭支部. 2021. 日本野鳥の会室蘭支部<<http://wb-muroranshibu.sakura.ne.jp/>> 2021年8月10日参照.
- 日本野鳥の会オホーツク支部. 2021. 日本野鳥の会オホーツク支部.<<http://www.wbsj-okhotsk.org/>> 2021年8月10日参照.
- 二村一男. 1987. 北海道演習林の鳥類相. 京都大学農学部演習林集報 17: 1-13.
- 二村一男. 2004. 京都大学北海道研究林白糠区の鳥類相. 標茶町郷土博物館報告 6: 49-63.
- 大迫義人. 1988. 北海道東部地方斜里の防潮保安林とその周辺における夏期の鳥類相. Strix 7: 231-238.
- 貞国利夫. 2019. 釧路湿原鳥類目録—1935年～2019年の記録—. 釧路市博物館紀要 38:23-80.
- 佐藤正三・石川信夫. 1981. 大雪山勇駒別及び姿見付近の鳥類調査. 北海道教育大学大雪山自然教育研究施設研究報告 16:15-27.
- 島田明英. 1996. 美幌町鳥類調査(1996年). 美幌博物館研究報告 4:1-18.
- 島田明英. 2016. 標津湿原の鳥類. 天然記念物標津湿原保全対策調査報告書. pp.267-292.
- 嶋崎太郎. 2006. 美幌町内の公園における繁殖期の鳥類相. 美幌博物館研究報告 13: 59-66.
- 嶋崎太郎・川崎康弘・町田善康. 2014. 美幌町鳥類目録. 美幌博物館研究報告 21: 27-62.
- 鈴木祥悟・由井正敏・伊藤功・高橋和規. 1990. 奥尻島の鳥類—繁殖期の森林性鳥類群集. 北方林

- 業 42: 197-201.
- 鈴木祥悟・由井正敏・伊藤功. 1991. 北限地帯ブナ林の繁殖期の鳥類群集. *Strix* 10: 213-218.
- 鈴木悌司. 1986. 十勝西部のカラマツ人工林における鳥類の繁殖密度. *日本林学会北海道支部論文集* 34: 121-123.
- 鈴木悌司・斎藤新一郎・斎藤満. 1983. 岩見沢地方の天然生落葉広葉樹林における繁殖期の鳥類群集. *北海道林業試験場研究報告* 21:95-103.
- 鈴木悌司・宮木雅美・斎藤満. 1989. トドマツ高齢人工林における繁殖期の鳥類相. *日本林学会北海道支部論文集* 37: 116-118.
- 高田令子. 2001. 根室支庁管内鳥類リスト. *根室市博物館開設準備室紀要* 15:95-114.
- Tamada, K. 2010. Relationship between census efforts and the number of species encountered in line transect censuses of breeding bird populations in woodland and grassland habitats of eastern Hokkaido. *Ornithol. Sci.* 9: 55-65.
- 玉田克巳. 2020. 北海道北部ベニヤ原生花園における鳥相変化. *Strix* 36:33-39.
- 玉田克巳・梅木賢俊. 2007. 札幌市と小樽市の鳥獣保護区に生息する繁殖期の鳥類. *北海道環境科学研究センター所報* 33:58-65.
- 富川徹. 2019. 夕張岳の鳥類. 夕張岳, 大いなる自然, その魅力を訪ねて. pp74-98. *ユウパリコザクラの会, 江別.*
- 富川徹・小畑淳毅・福岡将之. 1995. 礼文島における春季(1994)の鳥類相. *利尻研究* 14:11-16.
- 筒淵美幸. 1998. 十勝地方の中部と北部における鳥類センサス. *上士幌町ひがし大雪博物館研究報告* 20:79-89.
- 渡辺恵. 2019. 網走市こまば木のひろばの鳥類相. *知床博物館研究報告 (41):* 41-47.
- 由井正敏. 1970. 標茶パイロットフォレストの鳥類相. *北方林業* 22: 329-334.

Distribution of two species of Reed Warblers *Acrocephalus* during breeding seasons
in Hokkaido, northern Japan

Yuzo Fujimaki

Higashi 4, Kita 2-6-1, Bibai, Hokkaido, 072-0005, Japan

I made route censuses on two species of reed warblers: Oriental (ORW) *Acrocephalus orientalis* and Black-browed Reed Warblers (BRW) *A. bistrigiceps* along 1,178 transects (2 km in length) situated in 1,041 quadrates (4.5 x 5.0 km), in Hokkaido from early May to late July 1976–2021. I obtained additional data from spot census results and literature reviews to determine a more detailed distribution. ORW was distributed mainly in plains and basins of southwestern and central parts of Hokkaido. BRW was distributed mainly in plains and coastal areas, and very few in inland basins. The main habitat was grasslands for both species with occurrence rates (No. of transects of occurrence/No. of transects censused) of 35.1 % for ORW and 62.7 % for BRW. They occurred mainly at an altitude less than 200 m.

Key words: breeding season, distribution, habitat, Hokkaido, Oriental Reed Warblers Acrocephalus orientalis, Black-browed Reed Warblers A. bistrigiceps